

見えない宝物

一年 青木 瑛子

「ここでは仕事を持たないものは、湯婆婆に動物にされてしまう。」

「ご存じ、千と千尋の神隠し」で、王人公千尋が、川の化身であるハクから聞いた言葉です。人は、どうあるべきなの。自分の意味って何なの。そんな疑問を持つ私の背中を、この作品が後押ししてくれる気がしました。

この物語は、千尋と両親とあるテーマパークの跡地へ足を踏み入れ、不思議な世界へ迷い込んでしまうところから始まります。余さえあればいいという高慢な態度をとった両親を動物に変えられた千尋は、働くか動物にされるかの選択に迫られ、迷わず働く道を選びます。そしてしたこともないような厳しい仕事や困難を乗り越えた千尋は現実の世界への帰郷を許されるというものです。

幼い頃の私は千尋の活躍を見て、ただただ純粋に感心するのみでした。しかし、改めて

見てみると、この作品に秘められている数多くの大切なことに鑑賞する度に気付いていき、ました。そして、表面を眺めるだけではもったいない、と強く感じるようになりました。

中でも、印象深い二つの場面があります。一つは、働かせてくださいと必死で懇願し、仕事と真剣に向き合う千尋の姿。物語の冒頭、のどかか抜けたような顔とは反対に、志念のもとに働く、引き締まり、それでいて生き、生き、とした顔に胸を打たれました。

もう一つは、千尋が瀕死のハクを助けてもらおうと、湯婆婆の双子の姉銭婆のもとへ訪れる場面。湯婆婆の善なる次女のような存在の銭婆は言います。

「一度あったことは忘れないものさ。思い出せないだけで」

この言葉は、この物語において重要な鍵を握っているように思えます。

「生きるのに疲れた」という言葉は、今、よく耳にします。そういつて自らの命を失う人

が後を絶ちません。私も生きるのは疲れる、  
と思ったことがあります。気付きました。  
それは言い過ぎだ、ということに。生きる喜  
び、そして希望を無くしたのでなく、忘れ  
ているだけだということに。

千尋は、恵まれていながらも幸せに気付い  
ないでいたのでしよう。何かを失なってみな  
ければ、自分の存在はひとつの奇跡であると  
いうことも思い起こせなかつたに違いありま  
せん。

人は誰でも自分だけの体験を積み重ねてこ  
こにいます。普段思い出せないそのことを、  
何かの拍子に蘇えらせることで、人は自分の  
存在を再確認するのでしょうか。

だから、私は意義深い人生を歩むため、  
やさかな努力を惜しまず毎日大切にすべ  
きなのだ、と分かりました。人と丁寧に接す  
ること、私は周囲からも必要とされる人間  
になれる覚悟です。最後に、私の世界を広げ、  
深めてくれた千尋。ありがとう。